

和田 廣 (筑波大学)「ヨハネス・クリソストモス著『処女と同棲する人々に対する反論 (S. Ioannis Chrysostomi Archiep. Constantinop. Contra eos qui subintroductas habent virgines.) についての一考察」

4世紀に始まるギリシャ正教会は、その当初から内外に諸問題を抱えていた。対外的には異教、ユダヤ教、マニ教、ギリシャ正教会の諸異端派信仰などとの正統・異端論争がそれであり、内部的には複合修道院制度や霊的結婚問題などがそれである。

霊的結婚とは、修道女や、終生の独身を神に誓った処女が聖職者や修道士、或いは俗人を自らの家に招き入れ(或いはその反対の場合もあるが)、結婚せずに、同棲生活を送ることを意味した。霊的結婚生活を送る者達はその理論的根拠を使徒パウロの『コリント人への第1の手紙』第7章、36以下に求めた。この習慣は、306年のエルヴィラの教会会議以来、何度となく教会会議や公会議で近視の決定が出されている。何故ならギリシャ正教会は、そしてヨハネス・クリソストモスを含めた主な教父たちは、女性には結婚して主婦となるか或いは修道女などとして生涯の独身を貫くかの二者択一の道しか認めなかったからである。にもかかわらず修道士や修道女の中には複合修道院制度などをも利用して、霊的結婚を続ける者が後を絶たなかった。

本報告ではコンスタンティノーブル総主教ヨハネス・クリソストモスの説教『処女と同棲する者達に対する反論』を通して、霊的結婚に対するヨハネスの見解を紹介したい。ヨハネスは言うまでもなくギリシャ正教会を代表する、もっとも権威ある聖書注解者であり、使徒パウロの書簡の解説者としても名高い。従って彼の見解はギリシャ正教会を代表する見解とも言えよう。同時に本報告では、ヨハネスの説教を通して彼が結婚、女性及び性をいかに見ていたかを探っていきたい。